

## 前書き

「犬も歩けば棒に当たる」「押っ取り刀でかけつける」「流れに棹さす」「気が置けない人」

これらは、意味を勘違いして使われやすい言葉の代表例です。自分はこれらの言葉をきちんと使っていると、自信をもって言えない人もいるかもしれません。

本書では、勘違いしやすい言葉、間違いやすい意味をもつ言葉を198語集め、もともとの意味を解説するとともに、なぜ別の意味で使われるようになるのか、使うときに注意すべき点は何かを中心にまとめました。文化庁が毎年行っている「国語に関する世論調査」の結果なども紹介しています。「自分の思っていた意味と違う」「ずっと違う意味で使っていた」という言葉に出会ったら、ふだん使っている言葉を見直すきっかけになるかもしれません。

本書に出てくる「間違いやすいことばの意味」を通して、皆さまのコミュニケーションがもっと豊かになることを願ってやみません。

ことばの使い方に悩むすべての人に――

さまざまな機会に皆さまのお役に立てば幸いです。

2025年6月 三省堂編修所

## この辞典の使い方

### この辞典に収録した言葉と解説

- 収録した項目数…198項目
- 意味を誤解して使いがちな言葉を中心に、語形を誤りやすい言葉なども取り上げました。
- もともとの意味が根強く使われている言葉も数多くありますが、なかにはもともとの意味ではほとんど使われず、新しい意味で使われている言葉もあります。それらについても、もともとの意味を示すとともに、なぜ新しい意味が生まれてきたのかもあわせて示しました。
- 主な国語辞典の記述や文化庁、国立国語研究所の資料などを参考にしましたが、言葉は変化するものであり、また辞書や資料によって記述内容や誤用かどうかの判断に違いがあります。したがって、「この意味は間違っている」とはせずに、「もともとの意味はこちら」と示すにとどめました。
- 大言海、大日本国語辞典、日葡辞書、各種語源辞典等を参照し、もともとの意味を示すとともに、現在使われている意味がどのように変化して生じてきたかを示しました。

### この辞典の見方

- 見出し  
読みの50音順に配列し、もともとの意味と、勘違いしやすい意味とを2択で示しました。

### 001 開いた口がふさがらない

ア：驚く。びっくりする。  
イ：あきれてものが言えない。

- 解説  
誤解が生じる背景や、主な辞書でどのように扱われているか、似た意味を表す言い方にどのようなものがあるか、使う際に注意すべき点はなにかなどをわかりやすく示しました。  
なお、解説中に「平成〇〇年度の「国語に関する世論調査」では～」などとあるのは、毎年文化庁が行っている「国語に関する世論調査」の結果を示したものです。その調査結果についても、一部解説を加えました。
- 用例  
その語を使った具体的な例を示しました。

## 001 開いた口がふさがらない

ア：驚く。びっくりする。  
イ：あきれてものが言えない。

### 【解説】

ももとの意味はイ。

「あきれてしまって、何も言えない」という、相手を非難する意味が本来の使い方である。

あまりにもあきれてしまうと、言葉が出なくなってしまうということからできた言い方である。とはいえ、驚いたときや強い感動を覚えたときにも、口をぼかんと開けたまま何も言えなくなってしまうことがある。そこから、「予想以上にすばらしくて驚いた」「感動のあまり言葉が出ない」といった意味で使われていると考えられる。

また、「言葉も出ないほどうっとりしている様子」という意味を載せている辞書もある。驚くという意味で使うことが完全に間違いだというわけではない。

しかし、現在では相手を非難する意味をこめて使われることが多いため、避けたほうがよい使い方だといえる。

### 【用例】

- 何度注意しても同じ失敗をするなんて、開いた口がふさがらないよ。
- 彼の部屋のあまりの汚さに、開いた口がふさがらなかった。

## 002 悪運が強い

ア：悪い行いをしたのに、報いを受けずにいる。  
イ：悪い状況になっても、うまく助かる。

### 【解説】

ももとの意味はア。

ここでいう「悪運」は、文字どおりの「悪い運。不運」ではなく、「悪いことをしても、報いを受けないですむ運」という意味で、「悪運が強い」は「悪い行いをしたのに、報いを受けずにいる（なお栄える）」というのが本来の意味である。

このような意味で使われていた言葉だが、「悪いことをしても、その報いを受けない」ということから、「悪いことがあっても、被害を受けずに助かる」という意味が連想され、「自分は悪運が強いから平気だよ」のような使い方をするが増えてきたと考えられる。

また「運が強い」という言い方は「幸運だ」という意味で普通に使われるため、「悪」がついた「悪運が強い」も「悪いことがあっても被害から逃れられる（ほど運がいい）」という意味で使われるようになったのだろう。

令和5年度の「国語に関する世論調査」でも、「悪い行いをしても、報いを受けずにいる様子」が24.3%だったのに対し、「悪い状況になっても、うまく助かる様子」が倍以上の67.2%という逆転した結果が出ている。

こうした結果を反映してか、「不運に遭っても、被害を受けない」という意味を載せている辞書もある。

### 【用例】

- 悪運が強くて横領がばれずにいたが、とうとう発覚してしまった。
- 階段を転げ落ちても無傷だったなんて、ほんとうに悪運が強いね。

## 003 あくどい

ア：しつこかったりくどかったりして不快だ。  
イ：度をこしてひどい。たちが悪い。

### 【解説】

ももとの意味はア。

「あくどい」の「あく」は「灰汁」のことだと考えられていて、野菜などに含まれるえぐみや渋みの意味である。そこから、色や味、やり方などがくどい、しつこいなどの意味が生まれ、さらにたちが悪いという意味に変わっていったと考えられる。

もう一つ、「くどい」に接頭辞「あ」がついたという説もあるが、こちらはやや少数である。

ところが、「あく」を「悪」だととらえるせいか、「正しくない。悪い」という意味で使われることも増えているようだ。「悪どい」とも書くとしている辞書もあるが、多くはこの書き方は誤り、あるいは俗用・当て字としている。

とはいえ、ほとんどの辞書が「度をこしてひどい。たちが悪い」という意味を載せている。この意味も市民権を得ていると言っていいだろう。

### 【用例】

- 週刊誌のあくどい表紙に閉口する。
- お金のために、あくどい商売を平気でする。

## 004 揚げ足を取る

ア：言い間違いや言葉じりをとらえて責めたりからかったりする。  
イ：失敗ややり損ないを見て責めたりからかったりする。

### 【解説】

ももとの意味はア。

「揚げ足」は、古くは馬の倒し方を言った言葉である。日葡辞書（17世紀初頭に刊行された、日本語をポルトガル語で解説した辞典）に、「Ague axiuo toru（挙足を取る）」という例文があり、「（馬を地面に倒そうとする時とか、じっと静止させたりする時とかに）馬の前足を持ち上げる」と述べられている。

その意味が転じて、相撲や柔道で、技をかけようとして浮いた相手の足を取って倒す意味で使われるようになり、相手の言葉じりとらえてなじることにたとえた言い方へと変化していった。

令和3年度の「国語に関する世論調査」では、「言い間違いや言葉じりとらえて責めたりからかったりする」が65.9%、「失敗ややり損ないを見て責めたりからかったりする」が8.8%、両方と答えた人が22.2%と、多くの人が本来の意味と答えているが、両方の意味と答えた人をあわせると、3割の人が失敗ややり損ないなど行動に対して使うとしている。

しかし、ほとんどの辞書では「言葉じり」「言い損ない」「不注意な発言」のように言葉を対象としており、相手の行動に対しては使わないほうが無難だろう。

### 【用例】

- つまらないことで揚げ足を取らずに、議論を進めよう。
- 人の揚げ足を取ってばかりいると、嫌われるよ。

## 005 あげく

ア：ものごとの最後には。結局。  
イ：おまけに。加えて。

### 【解説】

ももとの意味はア。「あげく」を強調した「あげくの果て」という言い方でもよく使われる。

いろいろなことをして、最後にたどり着いた結果を表す言葉である。「あげく」は漢字で「挙げ句」「揚げ句」と書き、連歌・連句の最後の七七の句のことを指す。そこから転じて、ものごとの最後を表すようになった。

「長時間議論したあげく、結論は持ち越しになった」のように、「(好ましくない)経過+あげく(に)+ (好ましくない)結果」という形で使われることが多く、結果の部分が追加されたような印象を受けることから、「おまけに。加えて」という意味に取る人がいると考えられる。

本来の挙げ句は、終わりとなる最後の句なので、物静かで穏やかに、少し祝言の内容を含むのがよいと考えられているが、現在では「さんざん悩んだあげく、何も買わずに店を後にした」のように、悪い結果になったときに使う。

「苦労したあげく、とうとう成功した」のように、よい結果に使うと不自然に感じられることが多いため、よい結果になったことを表す場合には「苦労した未～」「苦労した結果～」のような言い方のほうが適切だろう。

### 【用例】

- 長い間入院したあげくに亡くなってしまった。
- 考えすぎたあげく失敗してしまうことが多い。

## 006 明後日の方向を向く

ア：前向きになる。  
イ：見当ちがいの方向を向く。

### 【解説】

ももとの意味はイ。

まったく見当ちがいの方向を向くという意味を表す言葉である。明日を向くべきところを、明日を飛び越えて別のところを向くことから、見当ちがいという意味を表すようになった。

「明日を向く」が、「今日の失敗は忘れて、明日を向いてがんばろう」のように、将来のことを考え前向きになるという意味を表すのに対し、「明日」よりもさらに先の「明後日」を向くということから、「先の先を見る」、つまり「前向きになる」という誤解が生まれたと考えられる。ここでいう「明後日」は、見当ちがいの方向という意味で、明日のさらに先という意味ではない。

なお、ここでいう「方向」は、目指すところや目標という意味と、物理的な向きという意味を含んでいる。そのため、「ボールが明後日の方向に飛んでいった」のような使い方もある。

### 【用例】

- 深読みすぎて、明後日の方向を向いた解釈になった。
- カメラを向けたのに、一人だけ明後日の方向を向いている。